泥とエリンギ

B・フィルドストン

1

最後に人間についての話をしよう。

この世の人間は大別すると、それなりに愚かな人間とひどく愚かな人間の二種類に分けられる。自分が愚かな人間だと自覚しているのが前者で、自覚していないのが後者だ。

別に愚かであること自体はそれほど問題ではない。なぜなら、愚かであることの定義は非常に繊細かつ不安定なものだからだ。それはコップに満杯に入った水のように、絶妙なバランスで存在している。人差し指でつつけば、いとも簡単に零れてテーブルを濡らすだろう。

話を戻そう。

愚かであること自体はそれほど問題ではない。問題はこの世の大抵の人間が、自分は愚かではないと思っていることだ。

経験上、大体8対2といった比率で存在している。男女差は無い。宗教的な優位性もない。菜食主義者だろうと、マルクシズム信者だろうと、生粋の非暴力主義者だろうと関係はない。

要するに、すべての人間はクズだということだ。

2

時代は瞬く間に移り変わる
ふとすれば気がつかないほどに

――ホライズン「時代」より

3

――インディーズのロックバンド「ホライズン」のボーカル、ＥＲＩが今月１０日から音信不通となっており、家族が警察に捜索願を出したことが１２日、関係者の取材から明らかになった。バンドの公式サイトでは「大切なお知らせ」として、「7月１０日より、ＥＲＩ（Vo.）と連絡が取れておらず、音信不通の状態が続いております」と公表している。

「ホライズン」はボーカルのＥＲＩを中心とした四人組のパンクバンドで、２００８年に「Breaking Narrow」でデビュー。激しいライブパフォーマンスが話題を呼んでいる――

ここまで読むと、麦草はパソコンを閉じてコーヒーを一口飲んだ。目の前に貼られたポスターを眺めながら、彼は憂鬱さを押し固めたような、深い溜め息をついた。

麦草は立ち上がると灰皿を片手に窓を開けた。そして狭いベランダに出ると、ポケットから煙草を取り出して火をつけた。

日差しはそれほど強くないが風が無いため、じっとりとした蒸し暑さが辺りを包んでいる。少し離れた向かいのマンションには洗濯物が干してあって、ヨットのようにはためいている。眼下の道路ではちらほらと人が歩いていた。

やれやれ、と麦草は思った。本当のパンクを鳴らせるバンドは、これで居なくなってしまった。顔も名前も知らないが、彼女らには灰になったとしても続けてほしかった。なんせ後にはもう、大衆の間をのたうち回る音楽しか残っていない。

麦草は煙草を深く吸って強く吐いた。くすんだ灰色の煙が空へと昇っていく。麦草はそれを眺めながら、自分の腹の底でなにかが鬱々と渦巻くのを感じていた。

麦草は煙草を灰皿でもみ消すと、部屋へと戻った。

彼は壁際の作業用デスクに戻ると、平積みになっている本の中から一冊を取り出して読み始めた。

２００６年７月。麦草は二十八歳で、作家だった。

といっても何かの賞にノミネートされるような大層な作家ではない。文学誌に短編を依頼される時以外は、記事を推敲する仕事で生計を立てている。新聞記事やネット記事、雑誌記事などの文章を読んで、ブラックコーヒーを飲みながら訂正する簡単な作業だ。麦草はこの仕事に大してやりがいを感じていなかったが、良くも悪くも様々な情報が自動的に入ってきた。

ホライズンのボーカルが失踪したという記事は、麦草に少なからず衝撃を与えた。なぜなら、パンクミュージックは麦草が愛好する数少ない物の一つだったからだ。

彼はパンクミュージックの持つ目的ある破壊性が気に入っていた。ただ感情的に破壊を繰り返す音楽とは違って、パンクの破壊には針金のような芯があった。

この芯が無いパンクは本物ではない、と麦草は考える。芯が無いパンクは、ショッピングモールにいる子供同じで、ただ駄々をこねているだけに過ぎない。

彼は特に女性ボーカルのパンクバンドを好んで聴いた。ホライズンはそうしたバンドの一つで、それなりの人気があるにも関わらず活動はライブとＣＤのみで、テレビなどには一切出演しない。公式のＳＮＳなどは勿論やっておらず、顔出しをしていない。彼女らはパンクに余計な不純物を持ち込みたくない、というのを信条としている。

ライブに行かない麦草は、メンバーの顔も、使用しているギターの種類も、履いている靴の色もわからない。ただ音源を買って声を楽しむだけだ。

それとは対照に、麦草はＪＰＯＰやアイドルソングといったものを嫌った。それらの類の音楽を耳にするたびに、彼はいつも一つの疑問を持った。

どうしてあんな腐ったぬか漬けのような音楽を聴いていられるのだろう？

麦草は本を閉じて、改めて目の前のポスターを眺めた。ポスターはいつものように汗をかいた女性のボーカルを平和的に映し出していた。

麦草は立ち上がると、お湯を沸かしにキッチンへと向かった。棚からパックのコーヒーを取り出して灰色のマグカップに投げ入れた。冷蔵庫からビスケットを四つ取り出して皿に乗せ、そのうちの一つを手に取ってかじった。

彼はふと、八年前のことを思い出していた。

４　〇１９９８年　７月　２１日

八年前。

うんざりするような暑さが続く夏に、麦草はホライズンと出会った。蝉がこの世の終わりのように鳴き、大学の講堂で買ったサイダーは炭酸が抜けている。

そんな夏だ。

その曲は大学から少し離れた、何も良いものがない古着屋で流れていた。汗をにじませた太った店長がレジに座り、店内は肌寒いほど冷房が効いていた。

曲は雑音の混じったギターのリフから始まった。続いて気だるそうな雰囲気を纏った声と弾くようなリズム隊が流れに乗った。

悪くない、と麦草は思った。

麦草は二つほど帽子を手に取って棚に戻した。

曲が終わると、彼は退屈そうに新聞を読む店長の前を通って店を出た。アスファルトからは汗の匂いがする湯気が立っていて、麦草は日陰を辿りながら駅へと向かった。

何故かさっき聞いた曲のワンフレーズが頭を離れなかった。

〇〇〇

ＣＤショップで買って来たホライズンのアルバムを聞きながら、麦草はふと高校時代のことを思い出していた。

たった一度会話しただけの、顔も名前も思い出せない女子生徒。

彼はなぜだか無性に彼女の消息を知りたくなった。

なぜだろう？

１９９６年　１０月　１０日

１９９６年の街は、通りすがる誰もが嫌な目をしていた。行き交う人々はみな重そうに頭を擡げて、灰色のコンクリートの上を彷徨っていた。

十年前。そんな時代だ。

高校時代の麦草は空を眺めるのが好きだった。朝も、

昼休みも、眼鏡をかけた英語教師の退屈な授業中も、麦草は空を眺めて過ごした。空は見るたびにその存在を変化させた。ある時はどこまでも現実的に存在し、またある時はどこまでも幻想的に見せかけて存在した。

当時の麦草はいわゆる影の薄い存在だったかもしれない。今、彼の同級生に電話を掛けて窓際で空を眺めていた男子生徒の名前を尋ねても、麦草の名前を思い出せる人はいないだろう。要するに、空を眺めている当時の麦草に声を掛ける人間などいなかったということだ。

「何を見てるの？」と空を眺める麦草に彼女は尋ねた。

「空」

彼女は呆れたように首をすくめた。

放課後の教室に、彼女は亡霊のように入ってきた。

「ねえ、そんなことは私だって知ってるのよ。どうしていつも空を眺めているのかを聞いてるの」

「ねえ、どうしてそんなことを聞く？」と麦草は言った。

彼女は透明な水を飲んで少し考えた。

「さあね。理由なんてない。面白そうだと思ったから。敢えて理由を言うのであれば、君の雰囲気が独特だからかもね」

麦草は浅い溜め息をついた。

「雲だよ。雲を見てるんだ」

「雲？」

「そう。流れていく雲。彼らは無秩序のようで、常に一定の方向に進んでいく。まるで何かの指標がその先に存在しているかのようにね。」

彼女は塵一つ浮かんでいない空を眺めて言った。

「その理屈でいうと、雲は随分とロマンチストだってことになるけど」

「それは違う。彼らは一見するとロマン主義者のようだけど、実のところリアリストなんだよ。どこまでもね」

「雲の話だよね？」

「雲の話だよ」

重く、それでいて苦しくない沈黙が続いた。行き場のないチャイムが二回ほど鼓膜を揺らした。

四十秒後、彼女はゆっくりと口を開いた。

「君はあれだね――――」

◯◯◯

そこで麦草の記憶は終わっている。麦草は彼女の名前も、顔すらもあまり良く覚えていない。すべては実体のない茫漠とした記憶の底にあるが、少なくとも彼女の目は、彼に悪い印象を与えていないままだ。

5

麦草は朝から午後の三時ごろまで退屈な記事の校正をして過ごした。記事は禿げた政治家が汚職をし、尻の軽そうなアイドルの熱愛が発覚、といった内容だった。

夕方になると麦草は吉祥寺へと出かけた。混雑した駅前を抜けて五分ほど歩いた先にある居酒屋を訪ねた。店はストリートに面した雑居ビルの三階にあり、毎年ここで高校時代の同窓会が行われる。

麦草は座敷席の一番端っこに陣取ると、ゴミ捨て場にいるカラスのように辺りを見回した。太って不健康そうな見た目の男性陣や、けばけばしい化粧をした女性陣は、彼に深い溜め息をもたらした。彼は一通り見終えると首を振って席を立った。そんな彼の行動を誰も気にしなかったし、彼もまた誰も気にしてはいなかった。

彼はくたびれた制服の店員に断りを入れ、店の裏へと向かった。そして手すりのない暗い階段を屋上へと登っていった。外へと続く重い扉を開けると、外灯の光とともに涼しい夜風が吹き込んできた。7月の中旬とはいえども夜はまだまだ肌寒い。

屋上からは駅前のロータリーが見渡せた。眼下では人々が行き場を失ったかのように、バスの合間を流動している。

彼は一つ身震いをするとポケットから煙草を取り出した。

麦草が煙草に火をつけようとした時、ふいに背後から「俺にも一本くれよ」と声がした。

麦草が振り返ると、そこには髪を肩口まで伸ばした長身の男が立っていた。

「なんだ江口か」

「なんだもなにも、お前に話しかけるような物好きは俺しかいないだろうよ」

そう言って江口は麦草から煙草を一本受け取った。

江口は白シャツの上に赤いチェックを羽織り、色の褪せたジーンズを履いていた。彼の身に着けている衣服はどれもヨレヨレだったが、まるで長いこと旅をしてきた冒険者の装備のように、彼の体によく馴染んでいた。

「どうだい、最近の調子は」

江口は煙草に火をつけながら言った。

「別に良くも悪くもないさ」と麦草は言った。

「そうだろうな。お前はそう言うと思ったよ」

そう言って江口は目を細めた。江口のその特徴的な切

れ長の目は、通った鼻筋と相まって狐を想起させる。髪と服装を整えれば好青年に見えるだろうに、と麦草は思う。

「お前は……最終まで残ったな、芥川賞」と麦草は言った。

「別に。それに意味なんかないさ」

意味なんかない、というのが江口の口癖だった。麦草の知る限り、彼は興味を持ったこと以外のことには、決して手を出さなかった。高校時代の彼は、国語と数学の授業には参加し、声の高い女性教師が行う英語の授業には決して出席しなかった。彼はよくそのことで職員室に呼び出されたが、教師に何を聞かれても、決まって「意味がない」と答えた。

麦草は彼の口癖をある程度気に入っていた。

「意味が無いといやあね、俺にはずっと不思議なことがあるんだよ」と江口は言った。

「何が」

「お前がさ」

江口は煙草で麦草を指さした。

「だっておかしいだろ。どうして毎回、同窓会に参加する？　こんなのはお前が一番嫌いそうな集まりだろ。好きなやつでもいるのか？」

そう言って江口はニヤリと笑った。

麦草はため息交じりに煙を吐いた。

「その言葉はそっくりそのままお前に返すよ」

「俺か？　俺はいんだよ。人の集まりってのはそれだけで面白いもんさ。妬み、嫉み、嫌み、いろんなものが心の底で渦巻いてる。しかも彼らはそのことを承知の上で他人のことを誉める。服が可愛い。靴が似合ってるってね。当然そんなことはミジンコほども思ってない。ミジンコほどもね。まだ政治家の方がほんとのこと言ってるぜ――――ちょっと言い過ぎたな。酔ってるみたいだ」

そう言って江口は笑った。

「で？　まだ俺の質問には答えてないだろ。誰か探してるやつでもいるのか？」

麦草はそれに何か答えようとして止めた。前髪の間からちらりと見えた江口の顔が、思ったよりも真剣だったからだ。

麦草はしばらく右手の煙草を見つめたあと、呟くように言った。

「――別に。意味なんかないさ」

江口はじっと麦草の目を見つめた。

江口の目の奥には何もない。何かがあったような痕跡があるだけだ。

江口は三十秒間見つめた後、諦めたように首を振った。

「まあいいさ。話したくないなら。今度会った時にでも話してくれよ」

江口は煙草を足でもみ消すと、扉の向こうへと消えていった。

麦草はそれを見届けると、短くなった煙草を深く吸い込んで、残りかすを携帯灰皿に捨てた。

麦草は靴の先で二回ほど地面を叩いた。

どうして俺は、あの日、あの時の彼女が何を言ったか覚えていないのだろう？

麦草は空を見上げた。

三角形の星がうんざりとした様子で彼を見下ろしている。

6　1998年　12月　3日

麦草は大学二年生の冬に、かつて通っていた高校を訪れた。電車を二つ乗り継ぎ、最寄りの駅からバスに乗った。バスにはコートを着た女子生徒しかいなかった。

高校はすっかりその姿を変えていた。校門脇にあったケヤキの木は姿を消し、代わりによくわからない銅像が立っていた。缶コーヒーとお茶しか並んでいなかった校舎前の自販機は、カラフルな見た目をした飲み物が占拠していた。

何よりあの息の詰まるような辛気臭さが、学校から感じられなかった。

麦草は足を止めて考える。

変わったのは何だ？

麦草は事務窓口に行ってベルを鳴らし、顔を出した若い女性に卒業アルバムを探してもらった。

数分後、麦草は卒業アルバムを受け取った。

麦草は例の彼女の姿を求めて、しばらくページを彷徨ったが、それらしい姿は見つからなかった。写真に写る女子生徒の多くは、当時と同様に嫌な目をしていた。

見たくないものを見ないようにしてきた目だ。

「誰かを探しているの？」と窓口の女性は言った。

女性は黒ぶちの眼鏡を掛けていて、ショートヘアに囲まれた顔にはふっくらと肉がついていた。声には瑞々しい張りがあって、耳によく馴染んだ。

「言いたくなければいいんだけど。ほら、あなたみたいな人って多いから」

「探してる」と麦草は言った。

彼女はやっぱりね、という顔をして頬杖をついた。

「男の子？　それとも女の子？」

「女性。それも、とびきり謎めいた女性。困ったことに

名前も顔もわからない」
「歳は？」
「僕と同い年。つまり、ちょうど君くらいの歳だね」
彼女は顎に人差し指を当てて少し考えた後、
「それって、私じゃない？」といたずらっぽそうに笑った。
麦草は彼女の目をじっと見つめた。大きな黒い目は澄んでいて、奥では水泡が揺らめいている。ガラス細工のような目だ。
嫌いじゃない、と麦草は思った。
「君じゃない。残念ながらね」
「それは残念」と彼女は首を傾けて笑った。
「ねえ、もうちょっと質問していいかしら」
「どうぞ」
「あなたはどうしてその人のことを探してるの？」
「さあ。それは僕にもわからない」
彼女は少し面食らったように麦草の顔を見た。
「じゃあ探す意味がないじゃない」
「そうだね」
麦草はこめかみのあたりを二度ほど叩いた。
「でもなんでかわからないけど、僕にはどうも彼女を見つけ出すことがとても重要なことに思えるんだ」
彼女は小動物を見るような目で麦草を見た。
「そんな不確定なことだけで、わざわざ卒業アルバムを探しに来たの？」
「そうだね」
「無駄骨じゃない」
「そうかもしれない」
彼女はペンを回しながら麦草の顔をじっと眺めた。
「あなたって変わった人ね」
「よく言われる」
彼女は落ちたペンを拾った。
「ねえ、連絡先を聞いてもいい？」
麦草は少し考えた後、首を振った。
「もし君に会うのが五年早ければ、仲良くなれたかもしれない」
「もう遅い？」
「もう遅い」
「それは残念」と彼女は残念そうに言った。
彼女は麦草から卒業アルバムを受け取ると、元の場所へと戻しに行った。

そうして麦草の大学時代は過ぎ去った。

7

七月下旬。
ホライズンのボーカルはまだ見つかっていない。
麦草はその日、ひどく胃のムカつく記事を校正しなければならなかった。いじめを苦にして自殺した中学生の記事だった。中学校側はいじめを隠蔽しようとして、金銭持って遺族の所へ交渉に行った。ゴミだ、と彼は思った。こういうゴミはさっさと死ねばいい。誰からも悲しまれず、死なれて喜ばれるような人間なのだから。
彼は夜になると街へと出かけて、沸々とした腹の底に酒を浴びせ続けた。
店が閉店すると、彼は街をぶらついた。冷えた夜中の街はゴミたちが出歩いていない分、いくらか綺麗に見えた。
彼はどうにも家に帰る気になれず、目についた小さな映画館に入った。映画館は古い怪奇映画を上映していそうな雰囲気を持っていた。
麦草は適当なチケットを一枚買って、ホールのど真ん中に陣取った。指定の番号とは違う席だったが、気にする人は誰もいないだろう。
映画は、人工兵器によって地球の文明が消滅するところから始まった。僅かに生き残った人々が、限りある資源を求めて殺し合いをするといった暗いものだった。ときおり、顔が良いだけで演技の寒い役者が、映画の雰囲気を台無しにしていた。
ふと麦草は、映画館が貸し切り状態ではないことに気がついた。彼の右斜め前方、前から三列目の一番端の席で、一人の女性が座って映画を見ている。
麦草は女性の存在に気がついてから、目を離すことができなくなった。暗闇の中で彼女の存在は、まるで朧月のようにぽっかりと浮いていた。
彼女は全裸だった。
彼女のボディーラインは美しかった、華奢でありながらどこか逞しさを感じさせる肩、形の整った張りのある肩甲骨、そして背中に一筋入る背骨のライン。黒髪が肩口でバッサリと切られていることが、その美しさを一層際立たせている。
面白い、と麦草は思った。
彼はそっと席を立ちあがると、彼女の方へと階段を下りていき、二つ隣の席に腰かけた。麦草がちらりと彼女の方に目をやると、彼女はそれを気に留める様子もなく映画を見ていた。
端正な顔立ちで、可愛いというよりかはカッコいいと

いう印象を受ける。印象的なのは目の色で、暗闇の中で水銀灯のように光っている。
麦草はどこかその目に見覚えがあるような気がした。
どうして自分は性的な興奮を覚えないのだろう、と麦草は思った。これだけの美しさを持った女性に、今まで自分は出会ったことがない。美しさといっても、ボディーラインの耽美さだけではない。どのような女性の体にも、必ずその人の汚さが滲み出る。どんなに巧妙に隠しても、泥水を吸ったスポンジのように必ずどこからか灰汁が出るものだ。ところがこの女性にはそれが一切見受けられない。
それは麦草にとって驚くべき事実であった。
「こんばんは」と麦草は声をかけた。
「どうも」と彼女はすんなりと返事をした。芯のある声だった。
麦草は次に何を言えばいいのか分からなかった。彼の頭に浮かんでくる幾つかの疑問は、彼女の前ではどれも無意味なもののように思えた。
「なぜ、裸でここに?」と麦草は尋ねた。
彼女は少し間を空けて唇を開いた。
「さあ。意味なんかないよ」
「じゃあ、質問を変えます。なぜ映画館に?」
「それもまた意味が無い」彼女は退屈そうに答えた。
「それは質問が? それとも答えが?」
「どっちも」
どっちにも意味が無い、と麦草は頭の中で繰り返した。
彼女は黙って映画を見ていた。実力のある俳優たちがばったばったと死んでいく中で、なぜか顔が良いだけの役者は生き残っていた。
「あの」と麦草は言った。「今日、泊る所は?」
「ないよ」
麦草はしばらく考えた後「なら、僕の家に来たらどうでしょう」と麦草は言った。
彼女は表情を変えずに答えた。
「それはそういう意味と捉えても構わない?」
「いや、そういうわけじゃないです。単なる事実として、貴方は今日泊るところが無い。そして俺は貴方のことをもっと詳しく知りたいと思っている。ただそれだけです」
「いいね」と言って彼女はニヤリと笑った。
麦草はポロシャツを脱いで彼女に着させた。下はどうしようもなかったので、麦草がタクシーを捕まえて来るまで、彼女は映画館内で映画を見続けていた。
この映画は後で見直してもいいかもな、と麦草は思った。

＊＊＊

タクシーを降りる頃には雨が降り始めていた。風も強くなり始めていて、遠くで雷が鳴っていた。アパートの部屋に戻るまでに二人はかなりずぶ濡れになっていた。
先に彼女にシャワーを譲った後、麦草も熱々のお湯でシャワーを浴びた。酔いはもうすっかり醒めていた。彼はクローゼットから適当な服を見繕って女性に着せた。
「ありがとう」と彼女は言った。
ここで麦草は、まだ彼女の名前を聞いていないことに気がついた。
「カオリ」と彼女は言った。
「カオリさん」
「カオリでいいよ。敬語もいらない」
「コーヒー? 紅茶?」
「いらない。お構いなく」
麦草はお湯を沸かして、インスタントの緑茶を一人分入れた。
彼がカップを持ってテーブルに戻ると、彼女はテーブル上の原稿用紙を手に取って眺めていた。
「この小説は、麦草君の?」と彼女は言った。
「そうだよ。一応これでも小説を書いてる」
「ふーん」
彼女は、まるで初めからそこが彼女の居場所であったかのように、そこにいた。
時計は二時を回っていた。窓の外は嵐になっているらしく、風に乗った雨が窓に叩きつけられている。
どッと疲れが麦草を襲った。非日常の圧力が容赦なく彼を押さえつけていた。聞きたいことは沢山ある、と彼は思った。でも今は横になりたい。例え眠れなくても。色々と考えるのは夜が明けてからだ。
「僕はもう横になりますけど、カオリさんは?」
「私ももう寝る」
そう言って彼女は紙束を無造作にテーブルに置いた。
麦草は押入れから布団と、数年間放置していた来客用のマットレスを取り出して埃を掃った。
「良かったら使ってもらって」
「ありがとう」と彼女は言った。
麦草は照明を消灯モードへと切り替えた。
暗くなった部屋で「おやすみなさい」と彼は言った。
彼女からの返事は無かった。

＊＊＊

窓の外では空気が唸り声をあげている。ときおり風が

窓を揺らし、雨がバシバシと音を立てる。暗闇の中で冷蔵庫の光がぼんやりと浮かんでいる。となりからは小さな寝息が聞こえてくる。

麦草は眠れなかった。体は鉛のように重たくなって休息を求めていたが、目を閉じても瞼の裏が見えるだけで頭は妙に冴えている。

これは彼にとって特別なことではない。横になることは出来ても、深い眠りに着くまでには時間が掛かる。目を閉じていることが不自然に感じられ、首はどこに置いても居心地が悪い。

麦草は良く考え事をした。考える内容は何でもいい。今日のこと、昨日のこと、数年前のこと。そして大抵の記憶は彼に負の感情を与えた。彼の、彼に対する感情だ。

今日も例外ではない。

麦草は、ガバリと起き上がって深い溜め息をついた。そしてキッチンに向かうと、棚からコップ取り出し、水を半分まで注いで飲んだ。彼は壁の遠くを見つめながら、今日起きた出来事をひとしきり考えていた。

ふと目を向かいの壁に向けると、そこでは女性のボーカルがいつものように汗を流して歌っていた。

自分はパンクに何を求めているのだろう、と麦草はよく考える。パンクロックの歴史は１９７０年代のアメリカに遡る。１９７０年代のアメリカは、ベトナム戦争の後遺症に苦しみ、ニクソンショックなどの影響で経済も痛手を負っていた。そんな中、そういったひ弱な政治の体制に不満を覚え、暗鬱とした感情を吐露するかのように生まれたのがパンクロックだった。

そう考えると、自分はパンクロックを遠心分離器のように使っているのかも知れない、と麦草は思う。心の底に溜まっていく鬱屈とした何かを、かき混ぜて薄めるかのように。しかしそれはパンクの副作用であって、自分がパンクそのものに求めていることではない。

麦草は再び、高校時代に出会った彼女のことを思い出した。あの日、あの時、彼女は果たして俺に何と言ったのだろう。

麦草は再び重たい溜め息をついた。

「死ねよ」と麦草は言った。

その言葉は静かに虚空へと消えていった。

しばらくして、彼はもう一度はっきりと言った。

「死ね」

麦草は頭を横に振ると、静かに布団に横たわった。

もし本当に言葉で人を殺せるのだとしたら、俺はもう百一回は死んでいる、と麦草は思った。

麦草はごろりと寝返りを打った。

二つの光る目が、じっと麦草のことを見つめていた。

8

朝、麦草が目を覚ますと、彼女はまだ眠っていた。まるで息をしていないかのように見えた。

麦草はベランダに出て煙草を吸った。夜明け前の空はうっすらとピンク色に染まっていて、白い雲の切れ端が新しい日の到来を告げていた。麦草はこの空を見るたびに少しだけ澄んだ気持ちになれた。ワインの澱のようなものなのかもしれない。

朝食は彼女が作った。キツネ色に焼いたトーストとオムレツ、レタスのサラダが食卓に並んだ。彼女は料理が上手だった。地元に愛される小さなお店であれば十分にやっていける腕があった。

「それで」と麦草はテーブルにフォークを置いて彼女に尋ねた。「実際のところ、君はどうして昨日の夜、裸で映画館にいたんだ？　色々考えたけど、僕が一番知りたいのはそれだよ」

彼女は静かなため息をついてホットミルクを飲んだ。

「何度も言うように、その質問には意味が無いんだよ。そこには私が裸で映画館にいたという事実があるだけ。皿をなぜ皿と呼ぶのかっていうのと同じ質問なの。わかる？」

「かろうじて」

「もしそこに意味があるとしたら、それは君が見つけなきゃいけないことだね。私が知ったことじゃない」

麦草はこめかみを軽くたたいた。

「つまり昨日のことは質問しても無駄だってことだね？」

「そういうこと」

やれやれ、と麦草は思った。

「ねえ、話は変わるけど」と彼女はレタスを頬張りながら言った。「しばらくこの家に泊めさせてもらえない？」

麦草は手を止めた。

「それは別に構わないけど。どうしてまた」

「行くところがないから」と彼女は言った。

「お好きなように」

麦草はその日のうちに歯ブラシと、女性用の服をデパートで調達した。もちろん下着も。

彼女は一日の殆どを麦草の家の中で過ごしていた。家事をするとき以外は本を読んだり、ＣＤを掛けて聴いたりして過ごしていた。

ふとした時に彼女は外出した。大体の場合それは夕方で、そして二十一時ごろに帰宅してくる。買い物カバンを手に提げていることもあるし、何も持っていないときもある。

彼女は自分の身辺について、一切語ろうとはしなかった。麦草が彼女について知ることが出来きたのは、左利きであるということと、どうやら同年代らしい、ということだけだった。

9　〇1999年　9月　28日

世紀末、人類は滅亡しなかった。

多くの安堵と少しの不本意が入り混じる街を、麦草はあてもなくぶらついた。

買いもしない靴を手に取って眺め、ゲームセンターでクレーンゲームをし、面白くない流行りの映画を片っ端から見た。

麦草には、街をぶらついて彼女とすれ違う可能性が、53枚のトランプから無作為に取り出した一枚のカードが何であるかを当てることよりも、ずっと簡単なことのように思えた。なにせトランプのマークを当てる確率ですら、4分の1以下だ。

麦草はこの年に数えきれないほどの靴を見て、数えきれないほどのぬいぐるみを手に入れ、数えきれないほどのポップコーンを買った。。

それでも彼女とすれ違うことはなかった。

〇〇〇

麦草が煙草を吸い始めたのはこの時からだ。

10

カオリが麦草の家に住み始めてから一週間が経った。

ある日麦草が散歩から帰ってくると、カオリはキッチンで鍋をかき混ぜていた。ふわりとした羊の匂いが麦草の鼻をついた。

麦草のケータイに江口から電話が掛かってきたのは、麦草がベランダに出て煙草を口に咥えていた時のことだ。

「よお、元気か？」と電話の向こうで江口の声がした。

カオリはスウプの味見に専念していた。

「どうして電話を掛けて来た？」

「そりゃお前の声が聴きたかったからだよ」

麦草はガラスの向こうにいる彼女を見た。料理は一段落したらしく、丸椅子に座って本を読んでいる。

麦草は過去に江口からの電話を受け取ったことがない。別に受け取らなかったわけでは無い。単純に掛かってこなかっただけだ。

「で？　要件は？」

「今日はこの後空いてるか？」

麦草は壁に掛かった時計を一瞥した。

「四時からなら」

「じゃあ四時に駅前のカフェに来いよ」

麦草が理由を聞こうとしたところで、試合中に挟まるコマーシャルのように電話は切れた。

＊＊＊

麦草は結局、あの日のことを江口にすべて喋った。夜に街をふらついて、小さな映画館に入ったこと。その中で裸の女性に出会ったこと。そして家に招き入れたこと。

江口は終始興味深そうに話を聞いていた。そして一通り聞き終えると、呆れたように首を傾けた。

「概念か何かかその女は」と江口。

「さあね」と言って麦草はグラスの水を半分飲んだ。「でも、何かあるのは確かだ」

「もしも、お前の話し相手が俺じゃなければ、お前は今頃たくさんのみどりに囲まれた施設にいるだろうよ」

そうかもしれない、と麦草は思った。

江口はしばらくウェットティッシュの袋を丸めていた。長い辺を残して細長く丸めると、結び目が真ん中に来るように丁寧に結んだ。結び目は綺麗な形をした五角形に整えられた。

「なあ江口」と麦草は言った。

「なんだ」

「雲はロマン主義者か？　それともリアリストか？」

江口は手を止めた。そして顔を上げると、麦草の目をまじまじと見つめた。それはまるで梟のようだった。

「なぜその二択なのかは知らないが――いや、違うな。そうじゃない」

江口は手にしていた五角形の袋をテーブルに置くと、コップを手に握って静止した。二十秒間ぴくりとも動かなかった。

「なあ麦草よ」と江口は徐に口を開いた。

「俺はお前が探してるものも、そしてそれに何を求めてるのかも知らないが、俺からお前に良い言葉を授けてやろう」

それはまるで、孫を諭す老人のような言い方だった。何も知らない人間に、何かを教えるときの言い方だ。

「良い言葉？」

「そう。俺が生涯大切にしてきた言葉」

「ぜひとも聞きたいね」

江口は音を立てないようにしてアイスティーを飲んだ。そして麦草の目を真っ直ぐに見た。

「悟ったふりが一番ダサい」
悟ったふりが一番ダサい、と麦草は心の中で繰り返した。
「ちなみに誰の言葉？」
「ん？　ああ、そうだな。お前のだよ」
そこで会話は途切れた。江口は二つ目のビニール袋に取り掛かった。麦草は、江口の手の中で結び目が出来上がっていくのを眺めながら、江口の言葉の意味を考えていた。
日が暮れかけた頃、二人は席を立った。足元の見えない夕闇が迫る中、麦草は江口に声を掛けた。
「芥川賞、惜しかったな」
「別に」と江口は言った。
「雲と一緒さ。それに意味なんかない」

＊＊＊

江口が自殺したのはその三日後だった。
記事の内容はこうだ。
――今月二日、芥川賞候補作家の恵口洋介(本名・江口洋介)さんが亡くなったことが明らかになった。警察関係者によると事件性は無く、自殺の可能性が高い――
いかれてる、と麦草は思った。
彼はベランダに出て煙草を吸った。
立ち昇る煙は、やがて入道雲へと変わっていくだろう。
８月になった。
ホライズンのボーカルはまだ見つかっていない。

１１　☁２００３年　６月　２２日

麦草が大学を卒業して三年が経った。
街はいつの間にか、着せ替えごっこをした人形のように色を変えていた。黒いカラスは姿を消して、白いカラスだけが街を闊歩していた。
これは比喩ではない。
「ねえ、私の事を覚えてる？」と電話越しで彼女は言った。
ある日の午後三時のことだ。麦草は築四十年のアパートの一室で、ホライズンのＣＤを聞きながら三年前に話題になった小説を読んでいた。
麦草は椅子の背もたれに体重をあずけると、目を閉じてこめかみを二度叩いた。
どこか聞き覚えのある声だ。透明で深みがあって、それでいて繊細な光を放っている、ガラス細工のような声だ。
ガラス細工？
そういえば、と麦草は思う。そんな目をした女性と母校の事務室の窓口で会話をした記憶がある。
声は目を映す。これは麦草の持論だ。
「確証はないけど――事務の窓口にいた女性かな？」
「正解」
「どうして僕の番号を知っている？」
「知らないよ。なんとなく適当に番号を打ち込んでみたら、あなたに掛かったってわけ」
やれやれ、と麦草は思った。真面目に答える気はなさそうだ。
麦草は徐々に彼女の雰囲気を思い出してきた。確か黒髪ショートカットで、ふっくらとした顔をしていたはずだ。それはきっと今も変わらないだろう。
「それで？」と麦草は言った。
「それでって？」
「一回会話しただけの、名前も知らない男の電話番号を調べてまで、電話を掛けてくる理由はなんだろう？」
「なんとなくよ」と彼女は切り捨てた。
麦草は少し面食らった顔をした。
「それに少なくとも、私はあなたの名前を知ってる。あなたの顔をどこかで見た気がして、ちょっと調べたのよ。そしたら案の定、同じ年に卒業してた」
麦草はお湯を沸かしにキッチンへと向かった。
「でも同級生じゃないだろ？　俺が君に気づかないはずがない」
「そうだね。隣の隣のクラスだった」
「だろうね、それでまさかそれを言いたいがために、電話を掛けて来たわけじゃないよね？」
「そんなわけないじゃない」
「じゃあそのわけを聞かせてよ」
彼女は少し沈黙した。まるで麦草の様子を推し量っているような沈黙だった。
「まだ女の子のことは探してるのかしら？」

☁☁☁

「なぜだか急にね、昔のことを思い出したのよ。退屈な英語教師の授業とか、不味い缶コーヒーの味とか。そういうのってわかるでしょ？」
麦草は頷いた。

「そしたら、とある女の子のことを思い出したのよ。一度だけ校内ですれ違った彼女。放課後の廊下を亡霊のように歩いてた。今まで一度も思い出したことなんてなかったのに、突然彼女のことをはっきりと思い出した。まるで記憶の片隅に大切に保存されてたみたいにね」
彼女は一呼吸置いた。
「同時にあなたのことを思い出した」
麦草はカップにお湯を移してかき混ぜた。
「つまり君は、その記憶の中の女の子が僕の探してる女の子だと思ってるんだね？」
「確信してる」
麦草はベランダへと続く窓のカーテンを開けた。風が洗濯物を揺らし、車の走る音が聞こえた。
この世に絶対はない。これは一般論だ。
そして彼女は頭が良い。
「それで、どんな女の子だった？」
「あまりがっかりしないで欲しいんだけど」と彼女は前置きをしてから言った。
「口じゃ伝えようがないのよ。写真でもあればいいんだけど」
「それは残念」
「ただね、彼女に関係する情報を二つ、あなたにあげる。よかったわね。一つは毎年7月に、吉祥寺の居酒屋で同窓会をやってること。もしかしたら彼女がそこに出席してるかも」
「同窓会ね」麦草はメモを取った。「もう一つは？」
「彼女は多分、左利きよ」
「どうしてそう思う？」
「腕時計が右腕についてた」
なるほどね、と麦草は思った。
「ありがとう」
「どういたしまして。それで、役にたつかしら」
「どうだろう」
「また電話掛けていい？」
「お好きにどうぞ」
そうして電話は切れた。
それっきり彼女から電話が掛かってくることは無かった。

12

アスファルトで目玉焼きができそうな日の夕方、麦草は川沿いに散歩に出かけた。土手からは河原でキャッチボールをする親子や、走り回る犬の姿が見える。空気はまだ昼間の酷暑を引きずっていたが、街には北西から優しい風が吹いている。川に映る雲がゆっくりと流れていく。どこからか音楽が流れていた。それは明るい曲調で、声の綺麗なボーカルが高音で歌っている曲だった。
麦草はうんざりしたように首を振った。こいつもまた、大した実力もないくせに圧倒的歌唱力などと持て囃されているタイプのボーカルだろう。どうも最近はそこのところを勘違いしている奴が多すぎる。綺麗な声をしていることと、歌が上手いことは直結しない。汚い風景を描いた絵が、必ずしも汚い物とは限らない。
麦草は雑草を踏みしめながら、自分が無性に腹を立てていることに気がついた。もしここに江口がいたら、この音楽になんと言うだろう。
しばらくして麦草は、自分の前方をカオリが歩いていることに気がついた。遠くて姿をはっきりと捉えることはできないが、彼女の持つ雰囲気は独特だった。一歩ごとに揺れる黒髪は夜の冷たい空気に似ていた。誰に対しても平等で、誰に対しても優しい夜に。
ふと麦草は彼女の向かう先が気になった。
彼女は橋の遊歩道へと入っていった。麦草も数十メートル後を追う。橋は巨大で四車線の道路があり、その中をトラックが唸り声をあげて走っていた。彼女は西日を浴びながら対岸へと渡り切ると、中心街の方へと向かって行った。彼女はどうやら駅の方へと向かっているようだった。騒がしい商店街の中を歩く彼女は、夏の葬列のようだった。
麦草は、彼女の乗った車両の隣の車両に乗り込んだ。老人席の向こうの窓からは、席に座った彼女を見ることができた。
彼女は村上春樹の小説を読んでいた。
電車は小さく揺れながら、中心街を走っている。麦草はヘッドフォンの曲を変えながら、彼女の方をチラチラと見ていた。彼女の表情からは、彼女が何を考えているのか、一切推測することはできなかった。
やがて車窓は中心街を抜けて住宅地へと変わった。それでも彼女には降りる気配というものがなかった。彼女はその特徴的な黒い瞳で、ただ前方を眺めていた。
麦草はしばらくぼうっとして過ごした。何かを考える気にはならなかった。どうせ胸糞悪いところに落ち着くのはわかっていたし、それに反抗するエネルギーも今は無かった。
彼女が下りたのは「白石台」という駅だった。車窓が畑の多い郊外を映し始めて三つ目の駅だった。麦草が腕時計を確認すると、針は17時半を指していた。ざっと四十分ほど電車に乗っていたことになる。

彼女は一つしかない改札を抜けると、灯の消えた道を歩きだした。道脇には蜘蛛の巣だらけの草垣がある。人のいない踏切を越えて、畑の横を抜けていく。その間、麦草は誰ともすれ違わなかった。まるでこの街だけが時間の流れから浮いてしまっているようだった。やがて彼女は幾つかの上り坂を越えると、道路わきの黒いフェンスを乗り越えて、鬱蒼とした林の中へと向かって行った。

彼女の背中は実際の距離よりも遠くに見えた。麦草は立ち止まって注意深く自分の足元を確認した。果たして自分は今どこに立っているのだろう？

数分経つと、徐々に周囲の木々の間隔が広くなってきた。そして拓けた場所に出た。

そこは野球場の外野席だった。麦草の足元にはプラスチック製のブルーの席が三列並んでいた。塗装はところどころ剥げていて、割れている物もいくつかある。右手には申し訳程度のバックスクリーンが見えた。どうやら麦草はレフトスタンドにいるようだった。フェンスの向こうのグラウンドには芝が道端の雑草のように茂っていて、ポールの影が長く伸びていた。

彼女は二列目に腰を掛けて、ダイヤモンドを眺めていた。ダイヤモンドに人影はなく、鳥が数羽寂しそうに地面をつついている。あるいは彼女はその鳥を眺めているのかもしれなかった。

彼女は鼻歌を歌っていた。風が吹くたびに切れ切れになる音符を、麦草は頭の中で繋ぎ合わせた。曲はホライズンの「時代」。それは迫りくる夕闇のように、一つの方向に流れていた。

麦草は静かに目を閉じて音楽に耳を澄ませた。彼は小学一年生から五年間、地域の野球チームに所属していた。ユニフォームは黒と白の縦縞で、みな身長のわりに背が高く見えた。

良い思い出は一つもなかった。

それでいい、と麦草は思う。思い出したくない記憶ほど、忘れてはいけない。恨まれることをしてきた奴は、せめて恨まれる対象であるべきだ。

時代は瞬く間に移り変わる。

夕影がグランドを包み始めた。麦草は煙草に火を着けた。

「いかれてる」と麦草は言った。

風が吹いて煙草の火が赤く燃えた。

「君は今の生活にうんざりしている」と彼女は言った。

麦草は煙を吸ってゆっくりと吐いた。

「それは違う。俺は、どうしようもない夜にうんざりしている」

「同じだよ」

「違う」

「じゃあ、なんで今、君はここにいる？」

なんで？

「……たまたま君が散歩しているのを見かけた。だから俺は、君の散歩についてきた」

「違う」と彼女は言った。その声は何事をも寄せつけない強さを持っていた。

「君は私についてきた」

13

麦草は十年ぶりにプロ野球中継を見た。阪神対巨人戦で、知っている選手は一人もいなかった。赤星も桧山も高橋もいなかった。

試合は序盤に巨人が二点を取って先制したが、六回に阪神がスリーランホームランで逆転した。

14　〇　2006年　8月　2日

その日は朝からずっと、月曜日の憂鬱を押し固めたような雲が空を覆っていた。今にも執拗な雨が降って来そうな空気が街全体を包んでいた。麦草は午前中に二度、買い物に出かけようとして思いとどまった。雨は降りそうで降らなかった。カオリは朝からキッチンで羊肉とトマトを煮込んでいた。自殺した江口から麦草宛てに封筒が送られてきたのは、その日の午後のことだった。

白い封筒には住所も宛名も書かれていなかった。麦草が糊を剥がすと、中から神経質そうな字が並んだ一枚の手紙と、写真が出てきた。

麦草はお湯を沸かしてコーヒーを入れると、デスクチェアに腰かけた。空には淀んだ雲が浮かんでいる。

手紙の内容はこうだ。

これは遺書じゃない。

俺からお前に充てられた純然たる手紙だ。

まあ手紙を書くこと自体すごく久しぶりだから、色々と読み辛くなってることは勘弁してくれ。

そもそも、この手紙がお前に届いてること自体が奇跡に近い。途中で俺が飽きて止める可能性も、描いてる途中でペンが折れる可能性だってあったわけだ。

まあ、この文章が文章として意味を持っている今、そんなことはどうだっていい。

どうも手紙というのはリズムが掴みづらいな。余計なことを喋り過ぎる。蛇口を捻ったままの水道みたいな気分だ。

さて。どうでもいい話をしよう。

お前が少し前に言った雲の話だ。

大体の人間は雲って聞くと、基本的には形のないものを思い浮かべる。うんざりするほど青い空とセットのように浮いてるそれだ。大体は良く分からん形で空に浮いていて、いつの間にか何もなかったかのように消えていく。

たまに形あるように見える雲もあるが、大体はそう見せかけてるだけだ。

ところが、俺は一度だけ、形のある雲ってのを見たことがある。もう随分と昔の話だ。

その雲は夕暮れに近い空に浮かんでいた。夕陽の逆光を受けて灰色になった空に浮かぶ、レモンのような形をした雲だった。一見するとそれは、周りに浮かぶ形のない雲と同じものに見えたが、俺は妙にその雲が気になって、ベランダでずっと見てたんだ。当時の俺は、梶井基次郎と同じ心情だったんだろうな。きっと。

初めは暇つぶし程度に見てたんだが、煙草を二本くらい吸ったところで、俺はその雲の形がいつまで経っても変わらないことに気がついたんだ。他の雲はとっくに千切れて無くなってるのに、その雲だけはまるで６０年代のカーステレオのように、いつまでも空に形を留めていた。

なんだか恐ろしく不安な気持ちにさせられたよ。その雲を見てると、心のバランスが上手く取れないんだ。片方の天秤にその雲が乗っていて、もう片方に必死におもりを置こうとするんだけど、全然釣り合いが取れない。そんな感じだ。

要するに違和感なんだ。雲の形が変わらないこともそうだけど、その雲は何かが変なんだ。根本的な何かが間違ってる。フェルマーの最終定理のようにね。

なあ、その何かって、なんだと思う？

その雲は、他の雲と違う方向に流れてたんだ。

何が言いたいかっていうとさ、雲は必ずしも一定の方向に流れるわけじゃないってことだ。もっと言えば、雲が目指す確固たる指標なんてものは、そもそも存在しない。

長くなったな。いや、大して長くもないか。

まあどちらにせよ、俺が言い残してたのはそれだけだ。

写真を同封しておく。後は自分で考えてくれ。

P.S

お前はきっとまだ間に合う。

麦草は写真を手に取って眺めた。写真にはレトロな雰囲気を持ったギター店が写っていた。ドアの前には古びた傘立てが放置してあり、窓から見える店内には雑然とアコースティックギターが並んでいる。赤色の剥げた軒先には「ギター専門店 EDGE」と書かれているのが読み取れた。

写真の裏には油性ペンで住所が書かれていた。

神保町××―××―×××

15

８月も中旬に入ったころ、麦草は神保町のギター街に出かけた。

最寄りの駅から中央線に乗り、お茶の水で降りた。日差しは強く、栗色の髪をした若者や、革靴を履いたサラリーマンで街は溢れかえっていた。

麦草は息の詰まるような人波をかき分けながら、しばらく写真の店を探した。

果たしてその店はギター街の外れにポツリと立っていた。写真で見たイメージよりもやや小さかったが、レトロな雰囲気は崩れてなく、古びた傘立てには持ち主のいない傘が三本ほど差さっている。まるでそこだけ６０年代から時が進んでいないように見えた。

「いらっしゃいやせー」と金髪の若い店員が挨拶をした。

「なにかお探しですかー？」

「いや、まあ、はい」

「エレキですか？　それともアコギ？」

「いや、探してるのはギターじゃなくて」

「はあ？」

「いや実は、人を探しているんだけど、この店で若い女性は働いてないかな」

「若い女性？」

「高校時代の同級生なんだけどね」

店員は腕を組んで数秒考えた後、言った。

「いや、働いてないっすね。四十くらいの婆さんはいるけど、若いって言ったらあれでしょ？　おじさんくらいの年齢でしょ？　てなるとちょっと思い当たんないすね」

「そう。いや、ありがとう」

麦草はぐるりと店内を見回すと、ドアに手を掛けた。

「あ、ちょっと待って」

麦草は手を止めた。

「随分前の話になるんすけど」と店員は頭の中を探るように言った。「二階に下宿していた人はいましたね。もちろん女性で」
「歳は？」
「え？　いや、正確にはわかんないすけど、二十五、六ってとこじゃないすかね？　五年前の話ですけど。やけに美人だったからなんか覚えてて。
――あの、店長呼んできます？」
「ああ、うん。そうだな。よろしく」
若い店員は奥へと下がっていった。
麦草は何気なく辺りのギターを眺めた。柱に掛けられた丸時計を囲むように、ギターがずらりと並べられている。
ギターを並べて飾るのには二つの理由がある。
一つは、客が探しやすいようにすること。
もう一つは、歴史の継承だ。
しばらくすると、店長らしき人物を連れてさっきの店員が戻ってきた。背が低くやや小太りで、優しい印象を与える大きい目は、若い店員との血のつながりを感じさせる。
「ああ、どうもいらっしゃいませ」と店長は慇懃に挨拶した。
「お手数をおかけしてすみません」
店長はいえいえ、と顔の前で手を振った。
「えっと、立ち話もなんですし、こちらへどうぞ」
そう言って店長は麦草を奥へと促した。

＊＊＊

「鈴木恵利さんのことですね？」と店長は穏やかな口調で言った。
「ええ、恐らく」
麦草はこめかみに手を当ててひとしきり記憶を探ってみたが、彼女の名前は浮かんでこなかった。
店長はゆったりと、しかしはっきりとした口調で言った。
「亡くなってます。五年前に」
「亡くなっている？」
「ええ。駅のホームから飛び込んで」
「駅のホームから」
「そうです。詳しいことは分りませんが、どうやら自殺だったようです。当時、息子――あいつは小学生だったので詳しいことは伝えてませんけど」
五年前に駅のホームから飛び込んで亡くなっている、と麦草は心の中で繰り返した。それらは一言も頭の中に残らなかった。
「私も警察から話を聞いて驚きました。まさか、といった感じでしたね。当時、彼女はそんな素振りを一切見せていなかったので」
麦草は深呼吸してテーブルのお茶を一口飲んだ。
「あの、ちなみに彼女の部屋って今どうなってます？」
「部屋ですか」
「ええ」
「今は物置になってますね。ただ彼女には身寄りがいなかったようで、親族が遺品を取りに来ることはありませんでした。ただ、彼女の私物を捨てるのもなんだか気が引けるので、多くの物が当時のまま残ってますけど。
――見られます？」
「できれば。ぜひ」
二人は階段を上って彼女の部屋へと向かった。下では若い店員が興味深そうに覗いている。二階には部屋が三つあって、突き当りに一つ、そして左右に一つずつ。右側が彼女の部屋だった。
「こちらです」
扉が開くと、ホコリ臭い匂いが麦草の鼻をついた。部屋は薄暗く、段ボールの箱や弦の切れたギターなどが煩雑に置かれている。
「ご自由に見てください。電気は右側ですので」
店長はそう言い残して一階へと降りていった。
正面奥には五十センチ四方ほどの窓があり、淡い光が差し込んでいる。その前には机と椅子が置き物のようにある。壁際には背丈の低い本棚が二つ並んでいて、日に焼けた本や漫画がホコリを被っていた。
麦草は右側のクローゼットの扉を開けて中を調べた。衣服は流石に処分されたようで、白い床にホコリだけが積もっていた。
殺風景な部屋だった。
麦草は煙草に火をつけようとしたが、流石にまずいと思ってポケットにしまった。
静寂が部屋を包んでいた。生活音も、かつて生活をしていたであろう音すらもしなかった。
ふと麦草は机の横にある段ボールの影に、一枚のＣＤが落ちていることに気がついた。**それは五年前と変わらない姿でそこにいた**。拾い上げてホコリを払うと、見覚えのあるジャケットが姿を現した。
ホライズンの「時代」。
麦草がＣＤのケースを開くと、一枚の紙片が音を立てずに床に落ちた。拾い上げて確認してみると、水性ペンで擦れた文字が書かれていた。

時代は瞬く間に移り変わる
私はもう行かなければならない。

麦草はポケットからライターを取り出して、紙片に火をつけた。
白くなった灰が地面に落ちて崩れた。
いかれてる、と麦草は思った。

＊＊＊

中央線の車窓からは川面が見えた。橙色の空を反射して煌々と光っている。川に掛かる橋には車の流れができていて、その上を気だるそうに膨れ上がった雲が流れている。
麦草は帰りがけに吉祥寺に寄ろうと思った。何となくかつて江口と話をしたビルの屋上に行きたかった。
麦草は電車を降りて夕暮れの街を歩きだした。
吉祥寺の駅前は人で溢れていた。多くの影が赤と橙の入り混じったレンガの上を流れていた。屋根のついた商店街では、首を曲げた街灯に火がともり始めていた。
麦草はここを歩くたびに、時間の進みが遅くなるような感覚に襲われる。右足が上がってから地面に着くまでの時間が、いつもよりも長く感じられる。もしかするとそれは、周りの流れが速すぎるせいかもしれなかった。
化粧品の匂いがする薬局の前を通り過ぎ、肉屋から伸びる行列を横切った。風が吹いて揚げ物のだらりとした匂いが鼻をついた。そしてファミレスの看板を横目に流して数歩歩いたところで麦草は立ち止まった。
彼は振り返って辺りを確認すると、もう一度目の前の事実を確認した。ファミレスの隣には、居酒屋があるはずだった。一階が古着屋で、その横に段差の高い階段がついている、雑居ビルがあるはずだった。
——ない。

ザアアアアと音を立てて、過去の記憶が麦草の頭に押し寄せてきた。今日までのありとあらゆる出来事が、砂嵐のように頭の中を吹き荒れる。断片になった映像と騒音のような声達が、どこからかやって来ては過ぎ去っていく。
麦草はその激しい喧騒の中で、一つのある言葉を思い出した。
「君は私についてきた」

麦草は首を振って辺りを見回した。
麦草はえもいわれぬ不安が体の底から這いあがってくるのを感じた。ここには目印がない。ここはどこだ？　果たして俺は今、いったいどこに立っている？
混乱する彼の頭の中に、やがて一つのフレーズが流れ出した。

時代は瞬く間に移り変わる

居酒屋は潰れたのではない、と彼は確信していた。
居酒屋は消えたのだ。

時代は瞬く間に移り変わる
時代は瞬く間に移り変わる

消したのではない。消えたのだ。

時代は瞬く間に移り変わる時代は瞬く間に移り変わる
時代は瞬く間に移り変わる時代は瞬く間に移り変わる
時代は瞬く間に移り変わる時代は瞬く間に移り変わる
時代は瞬く間に移り変わる時代は瞬く間に移り変わる
時代は瞬く間に移り変わる時代は瞬く間に移り変わる
時代は瞬く間に移り変わる時代は瞬く間に移り変わる
時代は瞬く間に移り変わる時代は瞬く間に移り変わる

時代は瞬く間に移り変わるのだ。

ふとすれば気がつかないほどに。

彼の視界がぐらりと揺れた。そのまま誰もいない雑踏の中に倒れ込んだ。激しく耳を打つ喧騒の中、彼の頭の中には一つのフレーズだけが永遠に繰り返されていた。

16

麦草は起き上がれないほどの高熱を三日間出し続けた。そしてその後、狂ったように小説を書き始めた。

17

「混沌だね」とカオリはテーブルに小説を置いて、ふわりと笑った。それは行き場のない笑い方だった。
三日前に完成した小説は、戦争ですべての人類が死に絶えるといったものだった。顔の良い役者は速攻で死んだ。大砲で四肢が吹き飛んだ。声が良いだけの非実力派歌手も死んだ。戦争で声の綺麗さは全く役に立たなかった。悟ったふりの酷く愚かな人間たちもみな一様に死ん

だ。死ぬ間際に、ようやく自分たちの愚かさに気がついた。宗教原理主義者も、自然環境主義者も、アナーキストも死んだ。すべてが赤いヘドロとなって世界を埋め尽くした。

そしてすべての人間がいなくなった地上に、一つの花が咲いて物語は終わる。

「君はあれだね――――」と彼女は言った。

「まず認めることだね」

「何を？」

「色々と。自分のことも、周りのことも」

彼女はカンテラのような目で、じっと麦草の顔を見つめた。そして諭すように呟いた。

「ホライズンなんてバンドは端から存在しないことも」

麦草は動かなかった。

彼女は浅いため息をついて、猫のように背を丸めて顎をテーブルに乗せた。

「もうさ、気がつけばパンクが聴こえてくるような時代は終わったんだよ」

「一つ質問してもいいかな」と麦草は言った。

「どうぞ」

「君は本当にそう思ってる？」

彼女は答えなかった。そして明るい声で言った。

「でもまあなんだ。あれだね。『すべての人間はクズだ』って締める君の小説、私は好きだけどね」

彼女はテーブルを手で叩いて立ち上がった。

「さて。私はもう行くよ」

「ねえ、もう一つ質問してもいいかな」と麦草は言った。

「どうぞ」

麦草はコップの水を半分飲んだ。そして少し間を空けて言った。

「どうして、行かなくちゃならない？」

彼女は音もなく笑った。

「――麦草君に良い言葉を教えてあげよう。『現在地は、時間ではなく空間で確認するべきだ』」

彼女はそう言い残してドアの向こうに消えていった。そこには彼女が纏っていた、薄暗い朝の匂いだけが残された。

18

――若者に人気のロックバンド「ホライズン」のボーカルＥＲＩが、九月二日、多摩川流域の川原で亡くなっているところを発見された。警察関係者によれば、自ら川に飛び込んだ可能性が高く、事件性は低いものとしている。「ホライズン」の公式ホームページでは「大切なお知らせ」として――

この記事を見ても麦草はそれほど驚かなかった。何となくそんな気がしていたからだ。

麦草は深い溜め息をつくと、パソコンを閉じて狭いベランダに出た。

そして麦草は、二本目の煙草を吸っている時に、自分が煙草を吸っていることに気がついた。

19

江口の葬式はひっそりと行われた。真っ暗な街に執拗な雨が降っていた。

親族以外の人間は数えるほどしかいなかった。

難解な人間だった、と麦草は思う。

なぜ鈴木恵利の居場所を知っていたのか。そしてなぜ俺が鈴木恵利を探していると分かったのか。

もしかすると、俺と江口は似た者同士だったのかもしれない。あいつは多分、俺よりも早く知っていたのだ。

なんにせよ、江口の人生は完結した。もう先に進むことも戻ることもない。誰かに人間性を判断されることもない。

つまり、江口は死ぬことで完成するタイプの人間だった。

鈴木恵利のように。

20

九月になった。

一つの季節が終わり、新しい季節が始まろうとしていた。どこかで駅のランタンが点けられ、海岸線の少女が大人になる。そんな境界線の時期だ。

麦草は棚に並んだホライズンのＣＤをずらりと床に並べた。七枚のシングルと五枚のアルバムのジャケットがカラフルな模様を床に作り出している。規則正しく配列されたそれらは、確かに歴史であり一つの時代の象徴でもあった。

麦草はケースからＣＤを取り出すと、一枚一枚丁寧に割っていった。指を切らないように慎重に、五百円玉ほどの大きさまで砕いていった。その音は嫌というほど無機質に部屋に響いた。まるで一定のリズムで刻まれるメトロノームのように。

麦草は粉々になった破片を袋に詰めると、川へと出かけた。

もうすぐ夕暮れを迎える街はいつもの喧騒を纏っていた。五時半を告げるチャイムがひとしきり街に響いた。
麦草は袋を川へと投げ捨てた。袋は音を立てて着水すると、浮かんだまま流されていった。
「さようなら」と麦草は言った。
答える人は誰もいなかった。
袋はやがて沈んで見えなくなった。
水面は乱反射し、橋の上を車が走り、土手を白い犬が走った。

麦草はベランダで煙草に火を着けた。
風に乗ったさっぱりとした暑さが辺りを包んでいて、向かいのマンションの洗濯物は、ヨットのようにはためいている。
やれやれ、と麦草は思った。
未だにベランダは狭いままだし、羊肉のスウプの匂いはキッチンに染みついたままだ。
生活は続く。
これは善悪の問題ではない。
単純に、在るか無いかの話だ。
つまり、あの日、あの時の彼女が、俺に何を言ったかなんて覚えてなくてもいい。
覚えてなくてもいいのだ。